

寄り添う気持ち持って



町連合婦人会
沼田けさ子会長



釜石市の「いのちをつなぐ未来館」で中学生のときに震災を経験した菊池のどかさん（左）の説明を聞く町連合婦人会の会員ら（令和元年7月）

町連合婦人会は震災後「女性の絆プロジェクト」として、津波の被災地域を訪問したり、沿岸から講師を招いての学習会などを実施。沿岸地域の婦人会との交流会も行いながら、震災について理解を深めてきた。

発災後、会員から「自分たちの目で沿岸の状況を確かめよう」と声が上がリ、1日かけて陸前高田から釜石、山田、宮古などを回った。沼田会長は「信じられない光景に言葉が出なかった。だが、沿岸

の方からは、交流していく中で『なんと頑張っている』という気持ちの強さを感じられた」と話す。

また、プロジェクトは震災を忘れないことだけではなく、防災に対する意識を持つことにもつながっているという。「自然災害が毎年のように発生している。震災の記憶を風化させないためにも、防災へ意識を向けるためにも、寄り添う気持ちを持ち、こういった活動を続けていけたら」と話した。

きょうまで

ここでは、この10年の間にさまざまな支援・交流に取り組んできた団体の思い、活動を通して生まれた本町と沿岸地域との絆について紹介します。

“浜の人たち”のために



町母子寡婦福祉協会
高野美恵子会長



釜石市の協会と合同で開催した海沿いでのバーベキューの様子（令和元年8月、町社会福祉協議会提供）

『被災地』のために支援する、という考えではない。

一人親家庭へさまざまな支援事業を展開する町母子寡婦福祉協会。高野会長は大船渡市の出身で、昭和35年のチリ地震津波を経験した。身を持って海の怖さを知っており、生まれ育った古里を含めた沿岸地域の惨状は他人事ではなかった。

「浜の人たちの中には、10年経っても元の生活に戻っていない状況もある。この節目は通過点の一つ」と話す。

釜石市で同様の事業を行っている協会と連携し、年ごとにお互いを行き来してバーベキューや地場産品を持ち寄った交流などを実施。釜石の各家庭の子どもが成長する姿を見て、喜びとともに月日の経過を感じている。

高野会長は「沿岸は私が生まれたところ。今まで続けてきたことは支援というより、ただ自分が好きなことをやってきただけで、生活の一部。こういった関わりをこれからも持ち続けたい」と話した。

20 年来の交流の絆



岩清水右京の会
廣田昭夫会長



令和元年の町秋まつりに出店した岩清水右京の会と普代村の合同ブース。産地直送の新鮮な海産物が来場者から人気を博しました。

本町の友好都市・普代村との交流が始まり昨年、20年の節目を迎えた。町内で交流事業の中核を担ってきた岩清水右京の会（元・岩清水産直組合）は、震災前から現在まで交流を続けている。

平成14年に東京都の岩手銀河プラザで実施した、同村との共同出店をきっかけにスタートした交流。震災が発生したのは交流開始から10年目の年だった。

地震で町内も混乱する中、廣田さんはその日の夕方には普代村役

場へ連絡を入れ、状況を聞いた。主要産業の漁業を支える港は壊滅。食料も不足した。同会は、翌日の3月12日から約1週間、物資を普代へ届けた。

廣田さんは「いつもイベントなどで協力してもらっている普代のこと、すぐ頭に浮かんだ」とを振り返る。

会員の高齢化など交流の継続への不安はあるが、廣田さんは「農家と漁師の交流など、普代との関わりについてさまざま考えていけたら」と語った。

あの日から

震災後、さまざまな復興支援活動が県内各地で行われました。町内でも沿岸被災地を思い、立ち上がった個人や団体が活動を通して現地住民と親交を深め、その交流は現在までつながっています。

生まれた縁、形に

3ちゃん矢次工房「荳わかめの味噌漬け」

地元の農産物を使った食品製造などを行う3ちゃん矢次工房は、「荳わかめの味噌漬け」を開発した。矢巾町産のみそ、山田町産の荳わかめを合わせた商品に、復興への願いを込めた。

漆原さんは「この商品を通して、三陸と手をつないでいけたら」と思いを語り、同工房の高橋ムツ子代表は「力を合わせて開発できて良かった」と話しました。

工房の一員で民謡歌手でもある漆原栄美子さんが、復興支援活動の一環で山田町を何度も訪問。その中で、現地の商工会女性部から荳わかめの活用が話題に上がり、一緒に取り組むこととなった。



矢巾・山田の魅力が詰まった
荳わかめの味噌漬け



山田町との交流から商品を開発した3ちゃん矢次工房のメンバーら